

## アントワープ労働者オリンピックとウォルター・シトリン

青沼裕之

### The Antwerp Workers' Olympiad and Walter Citrine

AONUMA, Hiroyuki

The Purpose of this study is to explain what help and cooperation Walter Citrine gave to the British Workers' Sport Association (BWSA) which tried to prepare for the Antwerp Workers' Olympiad in 1937, and send the British team to Antwerp.

This thesis divides on four chapters : first, introduction ; second, trading views on holding of the Antwerp Workers' Olympiad between the International Federation of Trades Unions (IFTU) and Walter Citrine ; third, negotiation between the Amateur Athletic Association and him about participation of the British team in the Antwerp Workers' Olympiad ; forth, conclusion.

The Antwerp Workers' Olympiad was organized and conducted by the Socialist Workers' Sport International (SWSI) which was led and supported by IFTU and the Labour Socialist International (LSI). Then BWSA, which prepared for the Antwerp Workers' Olympiad and sent the British team to Antwerp, was patronaged by the Trades Union Congress (TUC). Walter Citrine was the general secretary of TUC General Council and the Chairman of IFTU in late 1930s, so that he could use his power to hold the Antwerp Workers' Olympiad.

#### 1. はじめに

本論文の課題は、1937年にベルギーの港町アントワープで国際労働者オリンピック〔アントワープ労働者オリンピック〕を開催するにあたり、またイギリス国内でのそれへの参加準備にあたり、ウォルター・シトリンがどのような協力と援助を与えたのか、を明らかにすることである。シトリンは当時、イギリス労働組合の統括団体である労働組合会議 (TUC) 総評議会の書記長の職にあり、また国際労働組合連盟 (IFTU) の議長を務めており、労働運動の世界ではイギリス国内はもとより国際的にも

影響力のある人物であった。さらに、アントワープ労働者オリンピックに向けてイギリス国内で準備に携わったイギリス労働者スポーツ協会（BWSA）はTUCの庇護のもとにあり、シトリーンはTUCのリーダーとしてBWSAへの協力と援助に責任を持つ地位にあったのである。

筆者自身はこれまで、スティーブン・ジョーンズの研究<sup>(1)</sup>に導かれながら、イギリス労働者スポーツ運動に関わって数篇の論文を書いてきた。<sup>(2)</sup>しかし、1930年代後半から1940年代にかけて労働者スポーツ運動に重要な役割を果たしたシトリーンの思想と行動については未だ明らかにしていない。<sup>(3)</sup>シトリーンは、ベルリン・オリンピック反対運動への関与から労働者スポーツ運動と密接に関わりを持ち始め、次いでアントワープ労働者オリンピックの参加準備に協力し、1940年代にはプラハからロンドンに事務局を移した社会主義労働者スポーツ・インターナショナル（SWSI）〔亡命SWSIとも呼称される。SWSIは社会民主主義勢力の国際スポーツ組織〕への援助に関わりを持った。本論文では、上述の通り、シトリーンのアントワープ労働者オリンピックへの関与に限定して、BWSAを初めとする労働者スポーツ組織がシトリーンにどのような貢献を期待し、またシトリーンがイギリスや国際的な労働者スポーツ運動にどのような関与をしたのか、を明らかにしようと思うが、それを通じてイギリス労働者スポーツ運動の労働組合運動への従属の問題についても考察してみたい。

さらに、アントワープ労働者オリンピックの研究は日本では皆無に近く、また諸外国での研究の紹介もきわめて少なく、その史実そのものがほとんど知られていない状況にある。<sup>(4)</sup>そこで本論文では、イギリスに残された史料から、アントワープ労働者オリンピックに関する一定の史実と部分的な像を描きたいと考えている。

ベルリン・オリンピック反対運動へのシトリーンの関与については別稿で扱う。<sup>(5)</sup>

## 2. アントワープ労働者オリンピックに対するIFTUの態度とシトリーンの対応

### 1) SWSIアントワープ総会とTUC総評議会執行委員会会議

アントワープ労働者オリンピックは、SWSIが主催する第3回目の国際スポーツ祭典となるものであった。第1回目が1925年にフランクフルトで開催され、第2回目が1931年にウィーンで開催されていたが、1937年7月25日から8月1日にかけてアントワープで開催されたこの労働者オリンピックが、SWSIの主催する最後のものとなった。このアントワープ労働者オリンピックは、1930年代後半のSWSI最大の活動であって、何年にも渡って準備が進められ、ナチスの出現のもとでは反ファシズム・スポーツ祭典という性格も併せ持った国際スポーツ祭典であった。この国際的な催しには、BWSAも相当に力を入れていた。大陸から離れた島国での、しかも2万数

千人の小さな組織にとって、大陸諸国の労働者スポーツ組織や労働者スポーツマンとの交流を図ることは大きな励みになったのである。

さて、SWSIには、アントワープ労働者オリンピックを開催するに当たって解決せねばならない問題があった。それは、労働者オリンピックにロシアと赤色スポーツ・インターナショナル（RSI）〔共産主義勢力の国際スポーツ組織〕を招待するのかどうかという問題であったが、この問題の背景には、ファシズム勢力の台頭と脅威のもとでの2年間にわたるSWSIとRSIとの共同・統一の交渉という組織問題があったのである。1935年3月以来、ほぼ1年間で数回のSWSIとRSIとの交渉がおこなわれたが、両者の間にはイデオロギー対立とともに目標や戦術の違いがあり、はかばかしい前進はみられなかった。そして、1936年5月15日にブリュッセルで、IFTU書記長W.スケヴネルス、労働者社会主義インターナショナル（LSI）会長フリードリヒ・アドラー、SWSIのJ.デヴリーガーによる協議がおこなわれ、次のことが確認された。すなわち、「ここでロシア、ノルウェー、フランス、スウェーデンをゲストとしてのみ招待することが決められた。我々の連盟が存在する国での共産主義少数派が招待されるのは、我々の連盟がそれを了解すると言明するときである」と。ここで注目すべきは、労働者オリンピックへの各国組織の招待という労働者スポーツ固有の問題を、国際的な労働組合と社会主義政党の統括組織との合同協議に委ねたことである。上野卓郎氏は、これをSWSIの「自主性の放棄」としている。<sup>(6)</sup>

その後、1936年8月29～30日にSWSIはアントワープで第7回総会を開催し、主にアントワープ労働者オリンピックとそれに先行するチェコスロヴァキアのヨハニスバードでの冬季オリンピックの開催に関わって、そこにロシアとRSIの代表を招待するのかどうか、を話し合った。<sup>(7)</sup> この総会にはイギリス代表も出席しており、イギリス代表はオランダ代表とともに、ロシアとは交渉するがRSIとは一切交渉しないよう提案していた。そして、総会終了2ヶ月半後の11月14日に開かれたTUC総評議会執行委員会会議では、SWSIアントワープ総会とこの2ヶ月半の動向について報告が提出され、議論された。その簡単な会議録をBWSA議長としてこの会議に出席していたハーバート・H.エルヴィンが記しているので、このエルヴィン会議録から執行委員会会議の議論を整理してみよう。

SWSIアントワープ総会での「イギリス代表団の行動は、IFTUとLSIによって敷かれた全般的な政策に一致して、赤色スポーツ・インターナショナルとの協力に反対し、そして〔アントワープ労働者オリンピックへの〕招待状がロシア労働組合スポーツ運動（RSIとは別個の運動）に送付されることに賛成して、発言し投票する」というものであったが、「それは7月にロンドンで開催されたIFTUの会議で可決された決議に従うもの

であった」こと、そしてSWSI総会后、このIFTU決議に従って「労働党執行部がオリンピックアードを支持することに同意したこと」、しかし「オリンピックアードがスポーツ運動に不適当な状況を惹起したとしてIFTUが反対を決定したこと」が報告された。続いて会議では、執行委員会の議長と合同書記が、SWSIがIFTUおよびLSIと連絡を取り、「困難を取り除く道を見出すために合同会議を準備するよう説き付けること」が確認され、また「議長はこの問題のことでウォルター・シトリーン卿に助言を求めるよう依頼された」。<sup>(8)</sup> ここでいう「困難」とは、IFTUのアントワープ労働者オリンピックアードへの不支持決定をいう。その詳しい中身については後述する。

## 2) ハーバート・H. エルヴィンの判断

TUC総評議会執行委員会の会議が開かれて以降、アントワープ労働者オリンピックアードへのイギリス代表派遣をめぐる議論と交渉が活発化していく。まずは執行委員会会議後すぐの11月16日に出されたTUC総評議会部局間通信を見てみよう。この通信の差出人のA.E.カーシイは次のことを伝える。すなわち、H.H.エルヴィンはSWSIからのアントワープ総会結果を伝える2通の手紙<sup>(9)</sup>に目を通し、双方に書記スイラバの署名があることを確認した上で、2通目の手紙に記されてあるロシアとのスポーツ関係の可能性について検討するためのSWSI、ロシア組織、RSI、並びにチェコスロヴァキア、フランス、ノルウェーの代表から構成される委員会の設置に対して異を唱え、また7月のIFTU会議の決議に留意して、RSIではなくロシアの赤色労働組合スポーツ運動と交渉が持たれる分には差し支えないという判断を与えた。H.H.エルヴィンのこの判断は、彼がロシアを訪れたときに知り得た、ロシアの労働組合運動は独立していてRSIとの接触を望んでいないという情報に因るものであった。さらにカーシイは、TUC総評議会執行委員会の決定に基づき、SWSIのイギリス・セクション〔BWSA〕が、W.スケヴネルス〔IFTU書記長〕とフリードリヒ・アドラー〔LSI会長〕とSWSI幹部の三者会議を持つべきであるとする通信をドイツとスイラバ宛てに送付したが、返答が14日までに届くはずが未だに届いていないこと、そして与えられた情報にH.H.エルヴィンが満足していることを伝えた。<sup>(10)</sup>

一貫してH.H.エルヴィンは、IFTUのロンドン決議に従ってRSIとの交渉に反対であり、しかし労働者が主権を持つ国ロシアの赤色労働組合スポーツ運動とは交流を図りたいという要求を持っているが、それはTUC総評議会の意向でもあった。H.H.エルヴィン自身、長年にわたり全国事務員組合（National Union of Clerks）の書記長であり、また1938年にはTUCの会長を務めた労働組合運動のリーダーでもあったから、労働組合運動への労働者スポーツ運動の従属の関係には何の矛盾も感じなかったといえよ

う。H.H.エルヴィンを代表とするイギリス側の意向は、SWSIの決定に最右翼の立場から影響を及ぼしたのである。

さて、解決されねばならない問題は、「スポーツ運動に不適當な状況を惹起した」としてアントワープ労働者オリンピックアードにIFTUが反対していることであった。

### 3) シトリーンとG. シュトルツの書簡交換

この辺の事情はシトリーンにも伝えられており、筆者の手元にある史料からもそのことがわかる。それは11月30日付のギリースからシトリーン宛の手紙であるが、その手紙でギリースは、TUC総評議会執行委員会会議に提出されたH.H.エルヴィンの報告には、労働党執行部がIFTUロンドン決議を考慮してアントワープ労働者オリンピックアードを支持することに同意したこと、並びにIFTUがその後反対を決定したことが記されているが、9月27日にパリで開かれたLSIビューローの会議で、アントワープ労働者オリンピックアードに賛成して、その成功のためにすべての社会主義政党が努力することが決定されたことにも注目するよう記している。<sup>(11)</sup>

H.H.エルヴィンの報告や提案、BWSAのSWSI宛て通信、TUC総評議会内での様々な情報をもとに、シトリーンは翌年1月末にIFTU書記補佐のG.シュトルツ宛に、上記の件でIFTUの意向を確かめるための手紙を送った。シトリーンは、IFTU執行部とLSIビューローがアントワープ労働者オリンピックアードについて異なる決定を下したことで、BWSAがオリンピックアードへ向けた基金の訴えを発する上で複雑な問題を引き起こしていることを率直に語り、それにもかかわらず、ベルギーのナショナル・センターもオランダのナショナル・センターもすでにオリンピックアード代表派遣に同意しており、チェコスロヴァキアも参加の意向であることを伝え、こうした事情を考慮してIFTUはオリンピックアードを支持する意向があるのかどうか、を問うている。<sup>(12)</sup> シュトルツからの返信は、2月2日付けの手紙でなされるが、その間にも1月25日付のH.H.エルヴィンからシトリーン宛ての手紙<sup>(13)</sup>が届けられており、その手紙の中で再度提案された基金の訴えについては、TUC総評議会の財務・総務委員会で、「アントワープ・オリンピックアードに対する国際労働組合連盟の態度に関してなされた質問への返答があるまでは延期されるよう勧告することが決定され」た。<sup>(14)</sup>

さて、シュトルツからの2月2日付けの返信の内容であるが、シトリーンの質問に答えた箇所を以下に引用する。

現在、IFTUはオリンピックアード支援のために訴えを発していないのですが、他方で、それに反対する行動もとることができないという状況です。それ故に、各々のナショ

ナル・センターは適当と思われるときに、その道徳的もしくは物質的支援を与えることが自由であり、またそれを保留するのも自由であります。／IFTU執行部によって下された決定は、赤色スポーツ・インターナショナルとの交渉についてのIFTUの不同意を、労働者スポーツ・インターナショナルにはっきり示すということでした。赤色スポーツ・インターナショナルは国際的運動の他の部門に不利な影響を与えるかもしれないのです。<sup>(15)</sup>

#### 4) IFTU決定の意図

ここで想起してほしいのは、1936年11月14日のTUC総評議会執行委員会会議に報告されたIFTU決定事項、つまり「オリンピックがスポーツ運動に不適當な状況を惹起したとしてIFTUが反対を決定した」という箇所である。これは、上記の引用文からわかるように、アントワープ労働者オリンピックの挙行をめぐるSWSIのRSIとの交渉それ自体が、IFTUロンドン決議に反するものであるという点にあった。最終的にSWSIとRSIの交渉は挫折したのであり、その後IFTUのアントワープ・オリンピック不支持の意向は、その根拠を失って宙に浮いたままであった。IFTUとしてもSWSIとRSIの過去の交渉を盾にとりてオリンピックに反対することは、実質意味を持たなかったのである。それ故、シトリーンの質問に対してはオリンピックに支援も反対もしていないと返答したのであった。こうして、このシュトルツの返答によって、「困難」な問題は解決された。

すぐにもシトリーンはシュトルツ宛てに、「1937年の労働者オリンピックに対して国際労働組合連盟がとった態度の説明には感謝申し上げます」と返信した。<sup>(16)</sup>

ところがH.H.エルヴィンは、シトリーンとシュトルツとの間でIFTUのアントワープ労働者オリンピックへの態度決定をめぐって手紙のやり取りがあったことを知らなかった。だから彼は、2月9日にもシトリーンに宛て、「もしイギリスの運動がオリンピックに参加しないのであれば、我々はこの点でIFTUに加盟する国でただ一つの組織」となってしまうから、スケヴネルス氏とアドラー博士と連絡を取ってほしい、と改めて懇請している。<sup>(17)</sup> シトリーンからの返信は2月10日付でなされるが、そこにもシュトルツからの返信のことは書かれていない。ただ、エルヴィンの手紙は財務・総務委員会で報告され、その会議での決定を待ってすぐに知らせる、と記してあっただけである。<sup>(18)</sup>

その2週間後の2月22日、ようやくTUC総評議会財務・総務委員会の会議が開かれ、既述のIFTU書記補佐G.シュトルツからの手紙をもとに、「総評議会が、イギリス労働者スポーツ協会によって始められた基金に対して、10ポンドの補助金を支給するよう勧告されることが決定された」。<sup>(19)</sup> シトリーンは2月25日付のH.H.エルヴィン

宛て手紙で、TUC総評議会の決定を伝えた。<sup>(20)</sup> H.H.エルヴィンからの感謝の返信は3月2日付でシトリンに届けられた。<sup>(21)</sup> そして遅ればせながら、シュトルツからIFTU加盟のナショナル・センター宛てに、「我々は、加盟するナショナル・センターに、力の及ぶところあらゆる手段を用いて労働者オリンピックを支援するように、また国内代表団をできるだけ大規模にするためにできうるすべてのことをするように、勧告しましょう」という賛同の手紙が、5月5日付けで発送されたのであった。<sup>(22)</sup>

### 3. アントワープ労働者オリンピック参加をめぐるAAAとの交渉

#### 1) 公式プログラムと宣言文

TUC総評議会がアントワープ労働者オリンピックへのイギリス代表団の派遣を支援する決定を下して2ヶ月経った4月22日、BWSAの合同書記長ジョージ・H.エルヴィンからTUC総評議会広報部宛てにオリンピックの公式プログラムの写しが届けられた。ジョージ・H.エルヴィンはプログラムの写しを同封した手紙で、プログラムが労働組合雑誌に掲載されることに感謝している。公式プログラムは、下記のような宣言文で始まり、その後に「旅程」「費用」「一般情報」「パリ・スポーツ大会（8月4～8日）」「競技日程」「スポーツ・プログラムの詳細：陸上競技／バスケットボール／ボクシング／チェス／サイクリング／フットボール／ハンドボール（女子）／水泳／卓球／テニス／重量挙げ／レスリング／その他のスポーツ」「スポーツ登録とチーム選考」の詳細が記されていた。

第3回国際労働者オリンピックは、世界の労働者の体育とスポーツのデモンストレーションであろう。それは、労働階級の国際連帯のデモンストレーションであろう。そして等しく、戦争に反対する人民の統一のための／清潔で健康的なスポーツのための闘いを継続しようという決意を表明するための／そして自由と民主主義の擁護のための／デモンストレーションであろう。／すべての参加者は、社会主義運動と労働組合運動の一員とBWSAの一員だけであろう。BWSAは、公式に労働組合会議と労働党の庇護のもとにあり、大英帝国を代表するにふさわしい。／アメリカ合衆国、ベルギー、チェコスロヴァキア、フィンランド、フランス、大英帝国、オランダ、ハンガリー、ノルウェー、ポーランド、スペインおよびスイスからの競技者を含む、15カ国から2万2千人の参加者が競い合うであろう。<sup>(23)</sup>

BWSAとしては、プログラムの最後に記されているように、後は「スポーツ登録とチーム選考」に入るばかりであった。申込用紙の返送は6月1日までとなっており、そ

の後速やかにチーム選考がおこなわれ通知されることになっていた。

## 2) AAA統括委員会の決定

しかし、再び問題が生じた。BWSAが加盟するアマチュア陸上競技協会（AAA）が、アントワープ労働者オリンピックアドへの陸上競技チームの派遣に反対意思を示したのである。これはイギリス独特のものであろうが、労働者スポーツ組織のBWSAは自ら申請してAAAの加盟組織となっていたので、国際スポーツ大会に参加するためには上部団体であるAAAの承認が必要であった。しかし、AAAはSWSIとはまったく交流もなく、1936年のベルリン・オリンピック大会に関しては、AAAは内部論争が見られたものの大会参加を決めたのに対して、SWSIもそのイギリス支部のBWSAも大会ボイコットを表明しており、両者の見解に相違がみられたし、そもそもが組織の性格として初めから食い違いが認められた。にもかかわらず、BWSAがAAA加盟を申し入れたのは、そうした問題が起こりうることを当然頭に入れた上であったろうが、実際のところ加盟の時期や真のねらいについては明らかでない。

1937年3、4月の段階でBWSAはAAAに対して、アントワープ労働者オリンピックアドへの代表派遣の許可の申し入れをおこなっていたが、その問題が5月1日のAAA統括委員会（General Committee）会議の議題の一つとなった。この会議には、BWSAを代表して議長のH.H.エルヴィンと合同書記長のC.J.ガンが出席しており、会場で彼らがBWSAの見解を説明した。説明を終えた代表が退出した後、この件でAAAとしての見解を新聞発表することに同意され、ハロルド・M.エイブラハムズとE.A.モンタギューが起草を引き受けることになった。彼らは即座に以下のような草稿を作成し、それが会議で承認された。

アマチュア陸上競技協会の統括委員会は、土曜日に第3回国際労働者オリンピックアドに関係のあるイギリス労働者スポーツ協会からの代表団と会見した。オリンピックアドは、社会主義労働者スポーツ・インターナショナルによって組織され、7月にアントワープで開催されることになっている。代表団は本委員会に、大会の競技セッションへのイギリス競技者の参加を認可するよう求めた。代表団に対しては、大英帝国がその一員である国際アマチュア陸上競技連盟の規則のもとにあり、ベルギーでの大会が王立ベルギー陸上競技連盟-陸上競技に関するベルギーの統括団体-によって許可されなかったがゆえに、そして、国際アマチュア陸上競技連盟の規則のもとでは、いかなる国の競技者も連盟の一員によって許可され準備される以外の大会で母国を代表することは許されないゆえに、イギリス競技者が競技する許可を受け取ることは不



可能である、と示唆された。<sup>(24)</sup> [後略]

さらにAAA統括委員会会議では、アントワープ労働者オリンピックを禁止する国際アマチュア陸上競技連盟 (IAAF) からの通信が提示され、IAAFの忠告に基づきこの大会への代表派遣を許可し得ないことをH.H.エルヴィンに伝えることが決定された。

### 3) AAAとBWSAとの交渉の決裂

こうしたAAAの派遣禁止決定がなされた後で、H.H.エルヴィンの申し入れによってウォルター・シトリーンはAAAの代表と接触することを要請された。<sup>(25)</sup> また、AAAの決定を不服として、何とかこれを撤回してもらうようにAAAの代表と交渉を進めていたH.H.エルヴィンは、シトリーンに宛てて、この件でAAA代表との話し合いの場もてることを知らせている。<sup>(26)</sup> AAA代表との話し合いは6月4日の午後4時から、AAAの事務所でおこなわれた。BWSA側からはTUC総評議会書記長ウォルター・シトリーン、労働党執行委員・下院議員フィリップ・ノエル＝ベーカー、BWSA議長ハーバート・H.エルヴィン、BWSA合同書記長ジョージ・H.エルヴィンとチャールズ・J.ガンの5名が出席した。この話し合いの様態を伝えた『デイリー・ワーカー』[イギリス共産党機関紙]のスポーツ編集者によれば、「AAAの決定の含意は、アントワープ・オリンピックが政治的な祝典であり、純粋にアマチュア・スポーツの大会でない、というものであった」。<sup>(27)</sup> 話し合いがもたれたその日のうちにH.H.エルヴィンはシトリーンに宛てて感謝の手紙を書いている。彼の手紙から、AAAの代表の中心がハロルド・エイブラハムズであることがわかる。<sup>(28)</sup> 数日後、シトリーンはH.H.エルヴィンに返信を送っているが、シトリーンはそこに「私は会議の調子に非常に失望いたしました。私には、正当な特殊な理由 (good technical grounds) ではありますが、エイブラハムズが、イギリス・チームがアントワープに参加するために与えられる許可を妨げるための論拠を見いだす決意でいるとしか考えられません」と記して、話し合いの悲観的な様子を伝えている。<sup>(29)</sup>

ここで、エイブラハムズがAAA側を代表してBWSA側の主張を退けたことには、簡単な補足説明が必要であろう。エイブラハムズはIAAFの決定に基づいてBWSAの要請を退けたのであったが、類似したことが2年前にもあった。ベルリン・オリンピックへの参加問題でイギリス・オリンピック協会 (BOA) 内で議論が起こったときに、エイブラハムズは、自らの提案で、IOCの決定を遵守してベルリン・オリンピックに参加すべきだとする決定へと導いたのであった。しかも興味深いことに、エイブラハムズは、今回のBWSA側代表に名を連ねているノエル＝ベーカーとベルリン・オリンピック参加

問題について手紙で議論を交わしていた。最終的に彼はノエル＝ベーカーに宛て、BOAの決定に基づいて「ベルリン・オリンピックへの抗議行動の勝算はない」と書き送ったのである。<sup>(30)</sup> エイブラハムズもノエル＝ベーカーも共にAAAを代表するBOAの協議会のメンバーであって、BOAの決定に関われる位置にいたが、ただしノエル＝ベーカーは当時労働党の運動に忙殺されていてほとんどBOAの会議に出ておらず、それに対してエイブラハムズはBOA内で絶えず重要な役割を担うという大きな違いがあった。それで、どちらかといえばノエル＝ベーカーは、オリンピック運動に関してエイブラハムズの主張を尊重して、『マンチェスター・ガーディアン』で個人的に見解を公表する以外は、BOA内に論争を持ち込むようなことはしなかった。1930年代の後半にオリンピック運動をめぐる困難な問題が生じたときに、エイブラハムズは、常に問題を解決する仕事の中心にいた。それは、彼のBOAやAAA内部での地位がそうさせたというよりは、多分に彼の当を得た提案と実行力を評価されてのことであったと推察される。

結局、AAAの決定は覆らず、BWSAは陸上競技の代表をアントワープに送ることができなかった。オリンピックの中心的種目の陸上競技に代表を派遣できなかったことでイギリス代表団は小規模化してしまったが、それでも競技者の総勢は53名に及んだ。<sup>(31)</sup> ジョージ・H.エルヴィンは、イギリス労働運動の情報誌『レイバー』の6月号で、「AAAの行為は邪悪なスポーツ禁止令だと公然と非難されたし、ハナン・スウェファアが『ジョン・ブル』の最新の号で簡潔にその立場を要約しているが、彼曰く、『ヒトラーやムッソリーニ、そして他の専制君主が殺意をもって実行したことを、AAAは単にその愚かさの故におこなっている』」と、AAAのやり方を批判した。<sup>(32)</sup>

#### 4) イギリス代表団の出発

アントワープ労働者オリンピックへのイギリス代表団は7月24日土曜日にロンドンを発った。パリでのスポーツ大会に参加する人々は8月9日にパリ経由で帰国し、参加しない人々は8月2日に帰国した。アントワープでそれぞれの競技で健闘していたイギリス代表団は、「総評議会はオリンピックで競い合っているイギリス代表団の好結果を心よりお祈り致します」というシトリンからの電報を受け取った。<sup>(33)</sup> イギリス代表団を代表して、ジョージ・H.エルヴィンがお礼の手紙を最終日の夜にシトリン宛にしたためた。<sup>(34)</sup>

筆者の入手した資料に「第3回労働者オリンピックーアントワープの印象」と題して『レディング・シティズン』1937年9月中旬号に掲載された、イヴィ・ノイエスの印象記がある。<sup>(35)</sup> 彼女の印象記には、彼女らのアントワープ滞在中の出来事、彼女

らの関心事、彼女らのオリンピアドに寄せる思いが綴られていて面白い。幹部による公的な発言とは異なり、彼女ら参加者の目を通して労働者オリンピアドを理解できる重要な資料である。また、シトリーンがイギリス・チームの派遣のために努力した労働者オリンピアドという国際祭典を、別の面から我々に印象づけてくれるものでもある。

この印象記を読んでもみると、彼女たち一般競技参加者の主要な関心事が、「諸外国からの競技者と訪問者と交わす交流」であり、観光であり、労働者オリンピアドでおこなわれたパレードやページェントの見物であったことがよくわかる。イギリス・チームの競技成果について触れられてはいるが、多くは交流や見物のことに紙数が割かれている。この印象記は新聞への掲載記事であるが、読んでいて不自然な型にはまった文章という感じを与えない。行進の最中に護衛兵の一人が何かものを落とした時のことをわざわざ記しているところなど、ほほえましく読み手の笑いを誘う。労働者オリンピアドのスローガンである「スポーツを通じて平和を」の理念も、諸外国の参加者との交流を通じてなされたバッジの交換の中に見いだしていて、素朴で庶民的である。公式文書には、「第3回国際労働者オリンピアドは、労働階級の国際連帯のデモンストレーションであろう」と気高く謳われていたが、彼女らにとっては、そうした気概とともに、もっと世俗的な意識として、それは観光旅行や見物や人との交流なのであって、生涯においてそう何度もない心躍る大きな楽しみであったのである。

#### 4. おわりに

アントワープ労働者オリンピアドへのイギリス国内での準備に際して、問題が持ち上がったときに、ウォルター・シトリーンは常に外部交渉の先頭に立つように要請され、そして先頭に立った。もちろん実務的な交渉や労働者スポーツ固有の問題の判断は、BWSA議長のハーバート・H.エルヴィンが当たったが、そのH.H.エルヴィンからシトリーンは常に頼りにされ、直接にまたはTUC総評議会を通して相談や依頼や懇請を受けた。

既述の通り、実質的なところでシトリーンが懇請されたのは、SWSIがRSIと交渉したことに反対して、IFTUがアントワープ労働者オリンピアド不支持決定を下したことで、イギリス代表派遣のためのBWSA基金へTUCからの寄付を求められなくなってしまったときであった。TUCの言い分は、国際統括組織のIFTUが反対しているのにTUCが独自に寄付は出せないというものであった。このため、H.H.エルヴィンはシトリーンにIFTUの意向を糺すとともに反対決定を変更させるように懇請した。結局、ベルギーやオランダ等の労働組合のナショナル・センターがオリンピアド代表派遣に同意しており、またSWSIとRSIの交渉も決裂していて、IFTUの反対決定が意味を持たなくなって

いたことが、事実上のIFTU決定撤回の要因であったが、シトリーンのIFTU書記補佐G. シュトルツ宛ての問い合わせの手紙が、1937年2月2日付のシュトルツの返信と5月5日のオリンピック支援の声明を引き出すもとなったのである。

しかし、陸上競技のイギリス代表チームをアントワープ労働者オリンピックに派遣するために、AAAの参加反対決定を覆すことはシトリーンといえども叶わなかった。これはAAAの反対決定というに留まらず、AAAが加盟するIAAFの代表派遣反対決定が最大の足枷となっていたのである。

見られるとおり、ハーバート・H.エルヴィンは、常にTUC総評議会および議長のウォルター・シトリーンの意向を確認し、またBWSAの活動への支持や援助を要請したが、それはTUCと労働党の庇護のもとにあるBWSAの組織性格に由来するものであり、さらには、H.H.エルヴィン自身がTUCの執行部に身を置いていたことにもよるものであった。つまり、BWSAは実質的に労働組合運動のスポーツ部門であり、特にTUCの指導を受け入れる組織であったために、スポーツ運動の労働運動からの自立という問題は立てようがなかったのである。

#### 引用および注

- (1) Stephen G. Jones, 'Die Britische Arbeitersport Föderation, 1923-1935', Arnd Krüger & James Riordan (Hrsg.), *Der Internationale Arbeitersport : Der Schlüssel zum Arbeitersport in 10 Ländern*, Köln, 1985 ; *Workers at Play : A Social and Economic History of Leisure 1918-1939*, London, 1986 ; *Sport, Politics and the Working Class : A Study of Organised Labour and Sport in Inter-war Britain*, Manchester, 1988.
- (2) ①「1930年代イギリスの『全国労働者スポーツ協会』の足跡」『一橋論叢』第105巻第3号(1991年)、②「イギリスにおけるベルリン・オリンピック反対運動1935～1936年—労働者スポーツ組織の主導的役割について—」『尚美学園短期大学研究紀要』第10号(1995年)、③「反ファシズム闘争期のイギリス労働者スポーツ運動—共同・統一へ向けての試み—」成田十次郎先生退官記念会編『体育・スポーツ史研究の展望』不昧堂出版、1996年。
- (3) ウォルター・シトリーンに関する伝記や歴史研究については、目下筆者は知り得ていない。イギリスの労働運動史上では著名な人物であったのであるから、まとまった研究があるように思われるが、今のところ見出せていない。本論文はイギリス労働者スポーツ運動の研究であってシトリーンに関する研究ではないが、1930年代後半の一時期に労働者スポーツ運動に関わった限りで、彼の思想と行動の一面を浮かび上

がらせることになろう。イギリスの労働者スポーツ運動とシトリーンの関係を丹念に辿る研究は、今のところイギリス本国にも見られない。

- (4) 日本では、功刀俊雄氏（奈良女子大学）の翻訳による論文、マレク・ヴァイツ「アントワープ第3回国際労働者オリンピック50周年—反ファシズム・反戦闘争におけるその意義—」『コーチング・クリニック』第4巻第4号（1990年）が、一番まとまった情報である。アントワープ労働者オリンピックの研究史と資料状況については、次の文献が参考になる。Franz Nitsch, 'Die III. Arbeiter-Olympiade 1937 in Antwerpen. Problemaufriß - Literaturübersicht - Quellenstand' [1937年アントワープ第3回労働者オリンピック—問題の概略・文献概要・資料状況—], in *Sozial- und Zeitgeschichte des Sports*, 2. Jahrgang Heft 1, 1988.
- (5) 筆者は「イギリス反ファシズム・スポーツ運動へのウォルター・シトリーンの関与について」と題して、日本体育学会体育史専門分科会誌『体育史研究』（第19号）に投稿予定である。
- (6) アントワープ労働者オリンピックへのロシアとRSI加盟組織の参加基準を定めたブリュッセル協議の内容については、上野卓郎「1930年代二つのスポーツインターナショナル関係史（Ⅱ）」『一橋大学研究年報 社会学研究』39（2001年1月）、91頁を参照。
- (7) SWSIアントワープ総会の詳細についても、上野、前掲書の78～97頁を参照。
- (8) Herbert H. Elvin's Report for the Meeting of the Executive Committee of the Trades Union Congress General Council, 14th November 1936. [Warwick University. Modern Records Centre (MRC)/MSS. 292/808.4/6]
- (9) SWSIは国際労働組合連盟（IFTU）執行部に宛てて、会長ユリウス・ドイツと書記ルドルフ・スィラバの署名で、アントワープ労働者オリンピックへの支援を要望する手紙を1936年9月2日付けで送った [For the Meeting of the IFTU Executive on the 21st and 22nd October, Paris : Letter from Comrade Deutsch of the 2nd September, 1936. MRC/MSS.292/808.4/6]。また、SWSIアントワープ総会の決定を不参加団体に伝える手紙を9月10日付で送った [Letter from the Socialist Workers' Sports International of the 10th September. MRC/MSS.292/808.4/6]。前者の手紙には、これまでSWSIと赤色スポーツ・インターナショナル（RSI）との長い交渉があったが、RSIはすべての共産主義的スポーツ組織をアントワープ労働者オリンピックに招待すべきことを望み、SWSIはロシアの組織のみを招待するつもりでいたので、交渉は挫折したこと、フランス、ノルウェー、スペイン、スウェーデンのようなどちらのインターナショナルにも所属しないス

ポーツ組織は招待されること、そして交渉が挫折したために、SWSIの力だけでオリ  
ンピアドを組織せねばならないのでIFTU執行部の支援を望むこと、が記されてい  
た。

- (10) Trades Union Congress General Council Inter-Departmental Correspondence  
: Letter from A. E. Carthy to H. V. Tewson, 16th November 1936.  
[MRC/MSS.292/808.4/6]
- (11) The Labour Party Inter-Departmental Correspondence: Letter from Gillies to  
Walter Citrine, 30th November 1936. [MRC/MSS.292/808.4/6]
- (12) Letter from Walter Citrine to G. Stolz, 22nd January 1937.  
[MRC/MSS.292/808.4/6]
- (13) Letter from Herbert H. Elvin to Walter Citrine, 25th January 1937.  
[MRC/MSS.292/808.4/6]
- (14) Minutes of Finance and General Purposes Committee, 25th January 1937.  
[MRC/MSS.292/808.4/6]
- (15) Letter from G. Stolz to Walter Citrine, 2nd February 1937.  
[MRC/MSS.292/808.4/6]
- (16) Letter from Walter Citrine to G. Stolz, 4th February 1937.  
[MRC/MSS.292/808.4/6]
- (17) Letter from Herbert H. Elvin to Walter Citrine, 9th February 1937.  
[MRC/MSS.292/808.4/6]
- (18) Letter from Walter Citrine to H. H. Elvin, 10th February 1937.  
[MRC/MSS.292/808.4/6]
- (19) Minutes of Finance and General Purposes Committee, 22nd February 1937.  
[MRC/MSS.292/808.4 /6]
- (20) Letter from Walter Citrine to H. H. Elvin, 25th February 1937.  
[MRC/MSS.292/808.4/6]
- (21) Letter from Herbert H. Elvin to Walter Citrine, 2nd March 1937.  
[MRC/MSS.292/808.4/6]
- (22) Letter from G. Stolz to Walter Citrine, 5th May 1937. [MRC/MSS.292/808.4/6]
- (23) Official Programme of Third International Workers' Olympiad (Organised by  
the Socialist Workers' Sports International), Antwerp, Sunday, July 25th to  
Sunday, August 1st, 1937, inclusive British teams and contingent organised by  
British Workers' Sports Association, Transport House, Smith Square, London,

S.W.1. [MRC/MSS.292/808.4/6]

- (24) Minutes of Meeting of the General Committee held at the Office of the Association, Crown Chambers, 118, Chancery Lane, London, W.C.2, on Sunday, May 1st, 1937. [The University of Birmingham. Centre for Sports Science and History/NCAL/XVIII/G7]
- (25) General Council Minutes, 26th May 1937. [MRC/MSS.292/808.4/6]
- (26) Letter from Herbert H. Elvin to Walter Citrine, 28th May 1937. [MRC/MSS.292/808.4/6]
- (27) *Daily Worker*, 5th June 1937.
- (28) Letter from Herbert H. Elvin to Walter Citrine, 4th June 1937. [MRC/MSS.292/808.4/6]
- (29) Letter from Walter Citrine to Herbert H. Elvin, 7th June 1937. [MRC/MSS.292/808.4/6]
- (30) Letter from Harold Abrahams to Philip Noel-Baker, 3rd December 1935. [The University of Cambridge. Churchill College. Churchill Archives Centre/NBKR/6/54/1]
- (31) *Labour*, July 1937.
- (32) *Labour*, June 1937.
- (33) Telegram from Citrine to Elvin. [MRC/MSS.292/808.4/6]
- (34) Letter from George H. Elvin to Walter Citrine, 1st August 1937. [MRC/MSS.292/808.4/6]
- (35) *Reading Citizen*, mid-September 1937. 邦訳全文を以下に示す。

7月24日、英国の競技者チームは第3回国際労働者オリンピックアードで競技するために、アントワープに向けてロンドンを発ちました。

チームはフットボーラー、サイクリスト、チェスプレーヤー、卓球とテニスのプレーヤーからなっていました。

旅行は平穩無事でした。私たちは12時間の継続した旅行の後アントワープに着きましたが、大変疲れお腹も空きました。

その週の最初の数日は試合のために費やされ、観光のための時間はほとんどありませんでしたが、私たちが外国に行くとき、私たちの多くにはそれは当然に思われました。私自身はブリュッセルで1日なんとか都合をつけて、さまざまな興味あるところを見物しました。私たちが王宮の前を通過したとき、護衛兵が行進をしてゆき、一人が偶然なにかを落とすように見えました。直ちに全員が向きを換え、他の者たちは仲間が

追いつくのを待っていました。この出来事は我が一団にはたいそうな娯楽でした。スタジアムでは週の最初の数日にさまざまなデモンストレーションがありました。そのいくつかを見るために、私は一度か二度（キャプテンが見ていないときに）うまく抜け出しました。私が最初に見たのはよその国のものでしたが、各々が彼ら自身の特別なカントリーダンスを踊り、終わりに彼らの国歌を歌い、すべての者がインターナショナルを唱和するためにスタジアムの中央に集まりました。私が見たそれ以外では、ほぼ1,500人のチェコスロヴァキアの人たちが身体文化演習の実演（歌も）をしていて、すべての者が海兵シャツとジャケットを着て、赤いタイと赤い帽子を身につけていました。高台から見おろしているように、私は、私たちがそれを見たときのこのスペクタクルを読者に想像させるでしょう。

次いで琥珀色と茶色のチューニクを身につけたノルウェーの少女たちの演技がありました。この演技は音楽と芸術の象徴であり、オリンピックの期間中に見たもっとも優雅な演技のうちの一つでした。

木曜日の夕方、ベルギーの若者が数年間にわたる労働者階級の生活を明示するページントを見せてくれました。すべてのことが非常に劇的であり、アントワープの通り中たいまつ（光）の行列で締めくくられるのでした。行列はほぼ2マイルに延び、7列か8列に並んでいました。素晴らしい光景に言葉は必要でなく、私たちの何人かもそれに加わりました。「No Passaran（奴らを通しはしない）」というスローガンが行進の間中ずっと掲げられていました。タウンホールに着いたとき、すべての者は左手に持ったたいまつを道のまん中の二つの大かがり火に投げ込みました。スペイン代表団は水曜日の夕方に到着したときに、たいへんな歓迎を受けていました。駅では数千人が横断幕（bonds）と旗を持って彼らを出迎えました。

木曜日の夕方、スポーツの初日にはすべての国のパレードが競われ、75,000人を迎えたスタジアムはほとんど満員でした。私たちが1周行進する間に、観衆は順にそれぞれの国を讃えました。最終的に私たちはスタジアムの中央に整列し、歓迎の挨拶を受けました。この種の国際的な示威運動参加者の感情を表現する言葉は見つかりません。ただ一つ私が個人的に自らに語りうる仕方は、私が言葉に満ち溢れていたと述べることです。

日曜日の朝にアントワープの通りの端から端まで、最後のパレードが行われました。私たちは一定の間隔をもって、インターナショナルを唱和しながら数マイル行進しました。

競技は非常に高い水準にあり、いくつかの世界記録が破られました。

イングランド・チームはもっとも小さいものの一つでしたが、私たちは首尾よく卓



球とテニスで榮譽を獲得し、我がフットボール・チームは敗者復活戦で圧倒的に勝利しました。

アントワープに滞在している間中、私たちは十分なもてなしを受けました。私にとって、この種の旅行でもっとも興味あることの 하나가、諸外国からの競技者と訪問者と交わす交流です。私は記念品として戴いた幾つものバッジでほとんど隠れた私のコートの襟を立てて帰国しました。私たちは外国からの同志に我が労働者旅行協会のバッジを提供しました。私がこれらのバッジを見るたびに、私の心は友人のところへ帰ってゆき、私たちが何か別の方法でそれを手に入れることができなくとも、ともかく「スポーツを通じて平和」を手に入れることができると私は実感するのです。

\*イヴィ・ノイエス婦人とフロス・ノイエス婦人は手に旗を持ち、彼女らはアントワープで開催された国際労働者スポーツ・オリンピックでの国別に列をつけたパレードにおいて、労働者プレーヤーの英国代表団の先頭に立った。



1936年アメリカ合衆国における国際労連代表の旅行（左から2人目が W. スケヴネルス、右隣が W. シトリーン）  
出典：W. スケヴネルス著、小山泰蔵訳『国際労働運動の45年—国際労働組合連盟の歩み—』（論争社、1961年）。